

愛努的古代・中世史 從交易的觀點

アイヌの古代・中世史—交易の視点から

Ainu's Antiquity・Middle Ages—from the Perspective of Trade

文・圖 | 蓑島榮紀 MINOSHIMA Hideki
(北海道大學愛努・先住民研究中心准教授)

譯者 | 陳由璋 (政治大學民族學系博士生)

文責・圖 | 蓑島榮紀 MINOSHIMA Hideki
(北海道大學アイヌ・先住民研究センター准教授)

訳者 | 陳由璋 (政治大學民族學科博士後期課程)



2013年から始まった「イランカラッテ」キャンペーンのロゴマーク。アイヌ語とアイヌ文様を組み合わせたデザインを使用し、アイヌ語の「こんにちは」で北海道の特色を押し出している。(出典:「イランカラッテ」キャンペーン推進協議会 <http://www.iranrapte.com/>)

2013年迄今產官學合作舉辦的iranrapte活動標誌。設計概念結合了愛努語與愛努紋樣。以愛努語的您好打造北海道的當地特色。(圖片來源:「イランカラッテ」キャンペーン推進協議 <http://www.iranrapte.com/>)

前号の加藤氏の文章にもあったように、北海道の歴史年表は、本州を中心とする日本史の歴史年表とは大きく異なっている。日本史でほぼ古代に当たる古墳時代や飛鳥・奈良・平安時代の時期について、北海道では続縄文文化やオホーツク文化、擦文文化が設定されている。

一般には「擦文文化期」が終わる13世紀頃からを「アイヌ文化期」と呼んでおり、さらに「中世アイヌ文化期」や「近世アイヌ文化期」などと細分されることもある。こうした通説的な北海道史の時代区分では、「アイヌ」は13世

如同前一期加藤先生の記事にもあり、北海道の歴史年表、與以本州為中心的日本史の歴史年表大相逕庭。日本史中對於幾乎等同古墳時代或飛鳥、奈良、平安時代の時期，北海道則是設定為續繩文文化或鄂霍次克文化、擦文文化。

一般是從「擦文文化期」結束的13世紀左右開始稱為「愛努文化期」，也有近一步將這段時期區分為「中世愛努文化期」與「近世愛努文化期」等情況。如此通說性質的北海道史時代區分之中，「愛努」是於13世紀左右登場，造成愛努的歷史中沒有「古代」存在。但

北海道史の時代区分 (藪島作図)
北海道史の時代区分 (藪島製圖)

本州の時代区分	年代(西暦)	北海道の時代区分	
旧石器時代	B.C. 25000 頃	旧石器時代	
縄文時代	B.C. 12000 頃	縄文時代	
弥生時代	B.C. 500 頃	統縄文文化期 (前半期)	
古墳時代	A.D. 250 頃	(後半期)	オホーツク文化期 (サハリン・道東 北沿岸部)
飛鳥時代	A.D. 600 頃	擦文文化期 (道央・道南)	
奈良時代	A.D. 700 頃	(全道, サハリン, 東北北部へ拡大)	
平安時代	A.D. 800 頃 A.D. 900 頃	(道東でトビニタ イ文化へ変容)	
鎌倉時代	A.D. 1200 頃 A.D. 1333	アイヌ文化期(中世)	
室町時代			
江戸時代	A.D. 1600 頃 A.D. 1800 頃	アイヌ文化期(近世) (幕領期)	
明治時代～		近現代	

筆者の考える「古代アイヌ史」の期間

紀頃に登場することになり、アイヌの歴史には「古代」が存在しないことになる。しかしながら、「アイヌの歴史」は13世紀から始まったわけではない。それ以前の時代・文化との連続性を意識した「アイヌ史」の枠組みが必要である。

この問題について、縄文文化 (B.C.12000 頃～B.C.500頃) とアイヌ文化との連続性を重視する意見もあるが、私は、3～7世紀頃の統縄文後半期に実質的な「アイヌ史」が開幕したとみるべきではないかと考えている。統縄文後半期は、鉄器の普及が進んだことによって、外部

は「愛努的歴史」並非從13世紀才開始的。「愛努史」的框架有必要意識到與在此之前的時代、文化之間的連續性。

針對這個問題，也有意見是認為要重視繩文文化 (B.C.12000左右～B.C.500左右) 與愛努文化之間的連續性。但我認為應該是要將3～7世紀左右的續繩文後半期看作實質上「愛努史」的序幕。續繩文後半期，隨著鐵器的普及進展，這個時代與外部社會之間交易重要性顯著增加，這件事可以說是與之前的社會、文化相差甚遠的關鍵點。另外這段時期，很有可能也在精神文化或祭祀、儀禮的層面發生了重

社会との交易の重要性が格段に増した時代であり、このことは、それ以前の社会・文化と大きく異なるポイントである。またこの時期には、精神文化や祭祀・儀礼の面でも重要な変化が起きた可能性がある。千歳市ユカンボシC15遺跡の続縄文後半期の層からは、民族誌的なアイヌ文化において主要な祭祀具であるイクパスイの原型とも考えられる木製品が出土している。

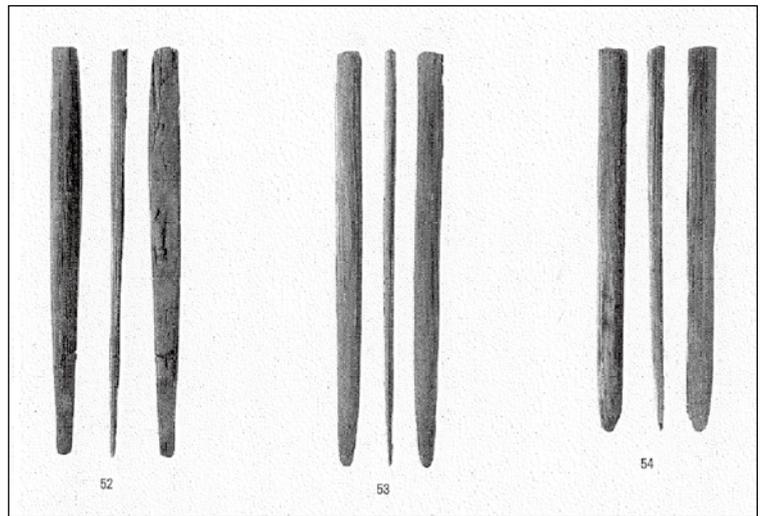
千歳市美々8遺跡でも、擦文期の可能性のあるイクパスイが出土している。この頃すでにイクパスイが成立していたとすれば、今日に至るまでアイヌ文化の中心的な儀礼となっているカムイノミ（神々への祈り）の原型は、続縄文後半期から擦文期に遡る可能性がある。以上のことから、私は続縄文後半期から擦文期の時代を「アイヌ史における古代（アイヌ史的古代）」と呼ぶことを提案している。

古代東アジアの動向とアイヌ史

北海道の人々は、古くから隣接する諸地域と盛んに交流していた。特に、隋・唐の中国統一に端を発する7世紀の東アジアの激動は、北海道にも確実に影響を及ぼしており、古代のアイヌ史は、東アジア・東部ユー

要変化。從千歳市Yukanboshi C15遺跡の續縄文後半期文化層中、出土了木製品、這種木製品也被認為是民族誌性質的愛努文化中主要祭祀工具*ikupasui*的原型。

在千歳市美々8遺跡，也出土了可能是擦文期的*ikupasui*。如果這個時期*ikupasui*已經確立的話，那至今為止為愛努文化的核心性儀禮*kamuy-nomi*（向眾神祈禱）其原型，則可能可追溯到續縄文後半期或擦文期。從以上敘述，我提案將續縄文後半期到擦文期的時代，稱為「愛努史之中的古代（愛努史性質的古代）」。



北海道埋蔵文化財センター編2003『ユカンボシC15遺跡（VI）』より、続縄文後半期から擦文前期の層位から出土したイクパスイ状木製品。

引用北海道埋蔵文化財中心編2003《Yukanboshi C15遺跡（VI）》、從續縄文後半期擦文前期的文化層位置所出土的*ikupasui*形狀木製品。

ラシア的な歴史の動向とも決して無縁ではなかった。

640年に唐の長安へ朝貢した北方の「流鬼」は、三方を海に囲まれ、大陸の靺鞨と盛んに交易していたとされる（『通典』）。このとき流鬼の使節は唐へ「貂皮」をもたらしている（『新唐書』）。この「流鬼」の実態は、サハリンのオホーツク文化集団であると思われる。7世紀のオホーツク文化は北海道東部の沿岸や千島列島まで分布領域を大きく拡大するが、それは大陸の靺鞨との関係に後押しされての動きであった可能性がある。

7世紀には、『日本書紀』にも北海道のことが登場する。658～660年にかけて北方を遠征した阿倍比羅夫の船団は、「渡島蝦夷」、「肅慎」と接触し、交流した。ここでの「肅慎」はオホーツク文化に該当する可能性が高く、「渡島蝦夷」は続縄文末期から擦文期の集団のことであったと考えられる。このとき阿倍比羅夫が「肅慎」からもたらした「罽皮七十枚」は、倭国に罽皮を高値で売りつ

古代東亞の動向與愛努史

北海道の人們、自古以來便與鄰近的各地區頻繁交流。特別是隋、唐統一中國所開端的7世紀東亞動盪，也確實影響到北海道，古代的愛努史也絕非與東亞、東部歐亞的歷史動向無緣。



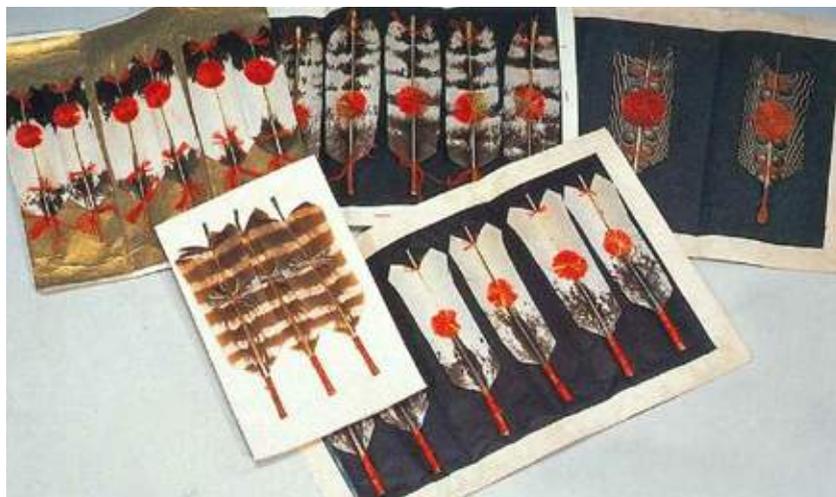
古代的北方世界（裴島作図）
古代的北方世界（裴島製圖）

640年北方的「流鬼」到唐朝的長安朝貢，「流鬼」位處三面環海，與大陸的靺鞨交易頻繁（《通典》）。此時流鬼的使節將「貂皮」帶到唐朝（《新唐書》）。此「流鬼」的真實面貌，被認為是庫頁島的鄂霍次克文化集團。7世紀的鄂霍次克文化分布領域大幅擴張到北海道東部沿岸與千島列島，這個情況可能是有跟大陸的靺鞨之間關係作為背後助力才出現的活動。

けようとした高句麗使を驚愕させている。北海道の人々と交易し、その産物を入手することは、激動する7世紀の東アジア情勢のなかで、倭国・日本の地位・威信を高めることにも大きくかかわったのである。一方、倭国・日本との交易によって、擦文文化やオホーツク文化の側は、鉄や繊維製品などの物資をより安定的に入手できるようになった。

古代末のアイヌと交易活動

10世紀頃の日本の文献資料には、宮中の儀式に用いる矢羽根として、「鷲羽」に関する記述が目立つようになり、11～12世紀前後には、新興の武士階級によってその需要はさらに増大していく。この「鷲羽」は、北海道産のオオワシやオジロワシのものが最高品質とされ、近世まで北海道を代表する貴重な特産品として知ら



鷲などの矢羽（仙台市博物館蔵）
（入間田宣夫1998「平泉藤原氏の北方交易」『白い国の詩』504より転載）

雕等鷹鳥の羽毛（仙台市博物館蔵）
（轉載引用 入間田宣夫1998〈平泉藤原氏の北方交易〉《白國之詩》504）

7世紀時，《日本書紀》之中也有北海道出現。658～660年這段時間阿倍比羅夫的船隊遠征北方後，與「渡島蝦夷」、「肅慎」接觸、交流。在此出現的「肅慎」非常有可能是歸屬鄂霍次克文化，「渡島蝦夷」則可以思考為續繩文末期到擦文期的集團。此時阿倍比羅夫想將「肅慎」所帶來的「七十件羆皮」，在倭國強勢地高價出售羆皮這件事讓高句麗使節驚愕。與北海道的人們交易，取得其物產這件事，在動盪的7世紀東亞情勢之中，也深刻地牽連著倭國日本的地位、威信之提升。另一方面，透過與倭國日本之間的交易，以擦文文化或鄂霍次克文化的角度來看，是可以能更加安定地取得鐵或纖維製品等物質。

古代末期與愛努的交易活動

10世紀左右的日文文獻資料中，以宮中儀式所使用的箭羽來看，關於「鷲羽」的紀載讓人醒目，11～12世紀前後，因新興的武士階級使其需求更加擴大延

れるようになる。

また、10世紀の王・貴族層は、高級な防寒衣として「黒貂裘」（クロテン皮のコート）を愛好した。『源氏物語』末摘花において、光源氏と対面した末摘花が黒貂裘を着ていたエピソードは特に著名である。こうした平安貴族社会のクロテン皮は、従来、大陸の渤海国や宋から輸入されたものと考えられることが多かったが、平安中期の関白・藤原道長の日記には、1015年に道長が宋の天台山に「奥州貂裘」を贈ったことが記録される（『御堂関白記』）。ここから、平安日本が「奥州」（本州東北地方）を経由してクロテン皮を入手するルートが有していたことがわかる。その実態は、北海道のエゾクロテンや、より高品質とされるサハリン産のクロテンの毛皮であろう。

10世紀頃の擦文文化は、北海道の道北や道東に分布を拡大し、さらには千島列島やサハリンにも進出の動きをみせる。その背景には、上記のような日本社会との交易の増大があった可能性が高い。北海道とその周辺の独

伸。這種「鷲羽」，是以北海道産的虎頭海鵬或白尾海雕的羽毛品質為最佳，到近世為止都是眾所皆知代表北海道的珍貴特產品。

另外，10世紀王公貴族階層，喜好「黒貂裘」（高貂皮的外套）這種高級防寒衣。《源氏物語》的〈末摘花〉篇中，與光源氏見面的末摘花身穿黒貂裘這件逸事則特別著名。如此在平安貴族社會的黒貂皮，一直以來多被認為是從大陸的渤海國或是宋朝所進口而來的，但平安中期的關白藤原道長の日記中，有紀錄下1015年道長將「奥州貂裘」贈送宋朝的天台山這件事（『御堂關白記』）。從此處，我們可得知平安時代的日本擁有透過「奥州」（本州東北地方），取得黒貂皮的管道。此事的實際情況，應該指的就是北海道的蝦夷黒貂皮，或是被視為更高品質的庫頁島産黒貂的毛皮吧。



クロテン（ウィキペディアより転載） 黒貂（轉載引用 維基百科）



サハリン州郷土博物館所蔵のニヅフの帽子の一部。右側の山吹色の断片（ENI34）が絹製品であり、放射性炭素年代測定で14～15世紀の可能性が示唆された（小田 寛貴・中村 和之2018「加速器質量分析法による蝦夷錦の放射性炭素年代測定—「北東アジアのシルクロード」の起源を求めて—」『考古学と自然科学』78より転載）

薩哈林州郷土博物館所蔵の尼夫赫人帽子部分。右邊様棠花色の断片（ENI34）が絹製品、放射性炭素年代測定表示年代可能為14～15世紀（轉載引用 小田 寛貴・中村 和之2018〈加速器質量分析法之蝦夷錦放射性炭素年代測定口尋找「東北亞絲路」起源口〉《考古學與自然科學》78）

自の生産物を、隣接する王権・国家との交易品として活用する戦略は、アイヌの歴史展開を突き動かす原動力となったのである。

中・近世アイヌの交易圏とその原型

以上のような古代末のアイヌによる縦横無尽の活動は、中世にかけてさらに活発化し、やがて13世紀後半にはモンゴル帝国との衝突を引き起こすことになる。『契丹国志』や『元史』には、「海東青」と呼ばれる優れた鷹のことが記述されている。海東青は、おそらくサハリン方面を原産とする鷹で、これを契丹や元・明・清などの王朝は競って入手しようとした。「海東青」をめぐる交易の利権は、アイヌとモンゴル帝国との紛争の要因のひとつにもなった。

その後もアイヌは、主として交易の面において、北東アジアをフィールドとするプレーヤーとして目覚ましい活躍をみせる。近世には、日本側から「蝦夷錦」（えぞにしぎ）と呼ばれ

10世紀左右的擦文文化、其分布擴大到北海道的道北或道東，其動態甚至可看到也有進入千島列島與庫頁島。此活動背景之中，很有可能與上述日本社會之間交易增大的情況。將北海道與其周邊獨自的特產物，作為與鄰近王權、國家之間的交易品而加以活用的戰略，則成為了觸發推動愛努歷史開展的原動力。

中・近世愛努的交易圏與其原型

以上所述的古代末期愛努縱橫四海的活動，到了中世變得更加活躍，終於在13世紀後半掀起與蒙古帝國之間的衝突。在《契丹國志》或《元史》中，有紀載稱作「海東青」的良雕。海東青應為原產於庫頁島範圍的雕鳥，契丹或元、明、清等王朝都曾爭相取得該雕。涉及「海東青」的交易利權，也成為愛努與蒙古帝國之間糾紛的一項要因。

愛努也在之後主要的交易層面之中，可從以東北亞為活動領域的參賽者(player)身分，看

た清朝の絹製品などが、アイヌの手を経由して江戸時代の日本社会に流入する交易ルートが存在した（山丹交易）。最近の研究によって、こうしたルートによる絹製品の交易は、明代から元代にまで遡る可能性も指摘されている。中・近世アイヌの広大な交易圏とダイナミックな活動は、すでに10世紀頃の古代アイヌの活動によってその原型が形成されていたといえるだろう。◆

到讓人驚嘆的活躍情況。近世時，曾存在日本方面稱為「蝦夷錦(ezo-nishiki)」的清朝絹製品等物品，透過愛努之手再流入江戸時代日本社會這條交易路線（山丹交易）。根據最近的研究指出，藉由這條路線所進行的絹製品交易，追溯的時間點可能可從明代起算到元代為止。中、近世愛努廣大的交易圈與富有動力的活動，其原型應該可以說是藉由既有10世紀左右的古代愛努活動所形成而來的。◆

作者簡介 | プロフィール

蓑島榮紀 MINOSHIMA Hideki

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

1972年横浜市生まれ。2000年、國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士後期課程修了。博士（歴史学）取得。苫小牧駒澤大学への勤務を経て、2014年4月より現職。専門分野は日本・北東アジア古代史、北方地域の交流史、アイヌ史。著書に『古代国家と北方世界』（吉川弘文館、2001年）、『「もの」と交易の古代北方史—奈良・平安日本と北海道・アイヌ』（勉誠出版、2015年）。主要論文に「古代北海道地域論」（李成市ほか編『岩波講座日本歴史20 テーマ巻1 地域論』岩波書店、2014年）、「7世紀の倭・日本における「肅慎」認識とその背景」（小口雅史編『古代国家と北方世界』同成社、2017年）などがある。



蓑島榮紀 MINOSHIMA Hideki

北海道大學愛努・先住民研究中心准教授

1972年横浜市出生。2000年、國學院大學大学院文學研究科日本史學專攻博士後期課程結業。取得博士（歴史学）。曾任職於苫小牧駒澤大學，2014年4月開始就任現職。專業領域為日本 東北亞古代史、北方地區的交流史、愛努史。著作有《古代國家與北方世界》（吉川弘文館、2001年）、《「物」與交易的古代北方史 奈良 平安日本與北海道 愛努》（勉誠出版、2015年）。主要論文有〈古代北海道地區論〉（李成市等編《岩波講座日本歷史20 主題卷1 地區論》岩波書店、2014年）、〈7世紀的倭・日本內的「肅慎」認識與其背景〉（小口雅史編《古代國家與北方世界》同成社、2017年）等。